一乘戒の意味

小寺文頴

傳教大師の戒の立場を標示する語として、最近「一乘戒」なる言辭が用いられている。[1] もと、一乘戒なる語は、顯戒論歸敬偈にでているもので、大師の著述に稀にみる用語である。「我今顯發一乘戒、利樂一切諸有情、爲開圓戒造此論、仰願常住深三寶」[2] とある。弟子光定等は、さかんに、大師の戒を一乘戒と呼んでいるので、大師自身が稀にしか使用されなかつたとしても、大師の戒の立場を明確にする意味で一乘戒なる語が用いられたのであろう。ところが、この一乘戒の一乘をどう理解するかが問題であつて、華嚴の一乘の意味なのか、法華の一乘をさすのか、更に檢討を要する問題が殘されている。石田瑞麿氏は「一乘戒は必ずしも法華一乘の戒でなければならない必然性を含まない。むしろ圓戒が梵網圓戒である以上、華嚴一乘の戒と見ることを許すように思われる守護國界章下卷に救華嚴家一乘義章という一章を設けて德一を論難した一例がじゆうぶん示してくれるように、法華と同樣、華嚴も最澄においては同じく一乘として大きな比重を與えられているから、梵網を結經とし、それを內包した意味での華嚴一乘を最澄が今顯發しようとした一乘戒の語に見ることが出來るのではなかろうか」[3] と述べられている。つまり、傳教大師は、華嚴にも造詣が深く、法華と同樣に華嚴を重視しているということと、もう一つはそれに關連して、梵網が華嚴を結成するという天臺大師の梵網經觀からの傳統的解釋の上から、一乘戒を華嚴の一乘と推定された如くである。石田氏のこうした結論が導きだされたその背景には、傳教大師が梵網圓戒といわれた語を梵網と圓戒とは同じものだという考え方がなされている爲である。かゝる立場から、華嚴の一乘說が建立されたのであるが、天臺で扱われている梵網が、單なる梵網でなく、天臺教學化された梵網であつて、梵網を天臺教學の中に導入されるとき、梵網にない思想が附加され、意義づけされている。[4] かゝる思想的意義づけをされた梵網を圓戒と呼ぶのであつて、意義づけされていない梵網を圓戒と呼ぶことは不可能であろう。このことは傳教大師も充分自覺されていた如くであつて、顯戒論卷中に、「論曰。新宗所レ傳。梵網圓戒。分備二圓五德一。汲引二一圓根一。當知。圓戒、圓臘、圓藏、圓禪、圓慧。非二天臺釋一難レ可二傳說一也。今高德所レ傳。非二圓律儀一」[5] とあつて、天臺の釋にあらざれば語ることができないといつておられるのであるから、天臺教學化された梵網であつて、傳教大師以前の梵網は、圓の律儀でないと明らかに述べられている。新宗などと殊更、新の字を使用されているのは、大師以前の梵網と大師の梵網とが、新の字を敢えて使用しなければならないほど、意味內容が違つておつたことを意識してのものだと推想される。かゝる意味で梵網といわずに、梵網圓戒とわざ〳〵圓戒の二字を附加されたのであろう。

從來、傳教大師の戒を「正依法華、傍依梵網」という言辭で說明されてきたのであるが、學生式問答が、僞撰として扱われる限り、正依法華の意味は傳教大師の戒の上で論ずることはできない。顯戒論歸敬偈の文に法華の意ありといわれるけれども、法華の意というより、天臺教學そのものであつて、直接法華經に結びつけて考える

には相當無理があるのではなかろうか、「稽首十方常寂光、常住內證三身佛、實報方便同居土、大悲示現大日尊、稽首十方眞如性、妙法一乘眞實敎、四敎五味權實等、八萬法藏一切經、稽首十方內眷屬、大智大悲大三昧、第一義諦和合僧、地前地上諸菩薩」[6]とあり、常寂光、內證三身佛、實報方便同居土、四敎五味權實等は、法華經というより、天臺敎學の用語であり、妙法一乘眞實敎といつて、妙法蓮華經という經でなく敎になつているなど、天台に對する歸依文でありこれを一切三寶の歸依文と解釋するのも、素直にうけとることができない、こゝは天臺の歸依文と考えるのが妥當であるまいか。

かゝる、傳敎大師の戒の根本的立場を、天臺敎學化された梵網（一乘戒＝圓戒）と規定したとき、一乘戒の基調が、天臺圓戒の流れの中に求められるべきであつて、法華經や華嚴經にその基調をおくべきでない。だから、一乘戒の一乘は、華嚴一乘でもなく、法華一乘でもない。これは明曠疏に述べられている。乘戒一致說の展開として把握されないであろうか。明曠の乘戒一致說というのは「制敎所明從禁惡邊而得戒名。化敎所明從修禪學慧而立乘稱、此則別也。若其通者三學相須如目足並能運載所趣之處。通得名乘。並有斷惡之能十總名戒。今善薩戒三義互通。從制止惡名之爲戒從制起行常住慈悲則是乘也。故一一戒乘戒具足。戒卽法身乘卽般若。乘戒不二慈悲應化卽是解脫」[7]とあり、止惡の邊より戒、慈悲の邊より乘と定義づけ、いづれの戒にも、止惡と慈悲（行善）が內在するとして、乘戒互融の旨を說くのである。この乘戒互融の基調には慈悲が根底に考えられているので、戒に慈悲的意味が强調せられてくるのも、これの特色であるが、この「乘戒不二慈悲應化」と「顯發一乘戒利樂一切諸有情」がその意趣において全く一致している點を考えると、乘戒一致說から一乘戒の展開が豫想され、この一乘が華嚴の一乘でないことは、極めて明瞭になつてくるのである。しかし、明曠疏から傳敎大師の戒の展開の中で、乘戒一致說から一乘戒という一線が豫想できるが、それ以外に一乘戒の基調が明曠疏に依つていると考えられる。顯戒論卷上の開雲顯月篇に「天台道遂和上。和上慈悲、一心三觀傳示於一言。菩薩圓戒。授示於至信。天臺一家之法門已具。」[8]とあり、一心三觀と菩薩圓戒が、止觀法門と戒法門という別々の傳授であるかにみられるが、明曠疏には、「戒の事に約し乘の理に達するも一刹那の心に十戒具足す」といつて、一心三觀を出ないものだと釋している。もとより、一心三觀は天臺法門の基調であり、極說であるから戒法門に限つてみることは出來ないが、一心三觀と菩薩戒の間には、密接な關係があつたとみなければならない。かかる立場から一乘戒の意味を考えるならば、一乘戒の語源のみならず、その思想的基調に於いて明曠疏に負うところ大なるものがあるといわねばならない。しかしながら、一乘戒の一乘が全く法華經の一乘と無關係であると論斷することはできない。何故なら、法華一乘の主張が大師畢生の悲願であつたという事實からみれば、法華一乘運動の一貫として、一乘戒を提唱されたとも考えられるからである。かかる大きな流れの中に一乘戒を求めることも可能であろうが、今はシナ天臺の圓戒流傳の中に一乘戒の基調があることを指摘するにとどめたい。

1　竹田暢典稿「傳敎大師の戒觀」（印佛研12—2 P二三一）　2　傳全一 P二六　3　石田瑞磨著「日本佛敎に於ける戒律の研究」（P二一二）　4　拙稿「天台大師の梵網經觀「叡山學報第四號　5　傳全一 P一三四　6　傳全一 P二五　7　大正藏四〇 P五八a　8　傳全一 P三五